

時代を撮って来たカメラ

資料提供・文 國枝 浩



写真右から「蛇腹・二眼レフ・コンパクトカメラ」

私がカメラにとり憑かれたのは、昭和15年・小学4年生の春でした。近くに同じような人がいて、欲しくなって親にせがんで、40銭の玩具カメラを買ってもらい、押し入れの中で現像、焼き付けもしました。日支事変中

で、誰かにスパイといわれ捨ててしまいました。兵隊さん送りなどをスパイが盗撮していたからでしょう。やがて太平洋戦争になり、それどころではなくなりました。

戦後の昭和21年に、父が何処からか中古カメラを手に入れて来たので又、熱が出てしまったのです。それはドイツ製のガラス乾板式の物でしたが、取り扱いが面倒で、カメラ店で蛇腹式の二眼レフになり、やがて一眼レフばかり買い替えて、今のデジカメにしました。

「わたしにも写せます」のコマー



玩具カメラで撮った写真(S15)



ガラス乾板写真(S27)



二眼レフ写真(S28)

シャルで、8ミリ、コンパクトカメラも流行り、今はガラケイからスマホと、一億総カメラマンの時代です。

ガラス乾板時代は6cm×9cm(ブローニー)、蛇腹は4.5×6(セミブロー)、二眼は6×6(シックス)で、一眼では昔からあったライカ判フィルムで、それもモノクロからカラーになりました。カラーが出た当時、現像は東京に郵送せねばならず、それを知らない郵便局の人が「未現像フィルムは郵便法で送れない」と云われ、フィルムメーカーの説明書を見せて納得してもらったものです。

又フィルムは普通は12〜36枚撮りですが、ポカのないよう一写入魂で撮ったのですが、今のデジタルメモリーカードは、そんな事考えないで撮りまくる事が出来、時代は変わりました。

因みにこのシリーズ前の「池田の原風景」には、写真のカメラで撮った物をよく載せて頂きました。

協力 郷土史の会